

【いろいろな集団（アソシエーション）】

学校や家庭は自然にあるように感じられますが、国家や私有財産などと同じく、どこかの時点で生まれ、社会や国によつて多様なあり方をしながら変化する、場合によつては消滅していく歴史的なものです。生活教育の原型のルソーやペスタロッチー、フレーベルの〈園〉は、母親や父親ではない大人が子どもたちと生活する点で、家庭からはなれて生まれ、学校に分化していくような、今でいえば社会福祉施設に近いものでした。

学校や家庭以外にもいろいろな集団があります。自覚的につくる集団を「アソシエーション」ととらえる見方が広がっています。PTAのAは、親（parent）と教師（teacher）のassociationというわけです。連歌の会や「一揆」もアソシエーションです。私たちは誰もが実に多くの集団に所属しています。

学校や家庭は、いずれそこから〈自立〉して〈出ていく〉ものですから、ずっと所属する集団でもありません。

生活教育 キーワード

せん。みんないろいろな集団に所属したりやめたりして、またつくったり壊したりして生きています。

生活教育では、学校や学級の中に、いろいろな集団をつくっています。ブタやアヒルを飼う集団、通信を発行する集団、けん玉で遊ぶ集団など、係や部活より自由度が高いのが特徴です。

ここで培われた力は、学校の外の集団に〈移住〉したとき、広がります。学校での子ども集団と地域の大人の集団のあいだにある〈青年の集団〉は地域づくりの主体が育つ点、また世代をつなぐ点で極めて重要です。学童保育や少年団などのOB会や、福井の田んぼ部のような小学校のOB組織、また同窓会（大学もそれまでの学校・園の青年OB組織）などが、家庭と学校と地域をつないでいきます。（研究部・加藤聡一）

〈参考文献〉

- ① 田畑穂ほか『アソシエーション革命へ「理論・構想・実践」社会評論社、二〇〇三年。特に序と第四章。
- ② 戸塚廉『学級文化の開拓』明治図書、一九七六年。